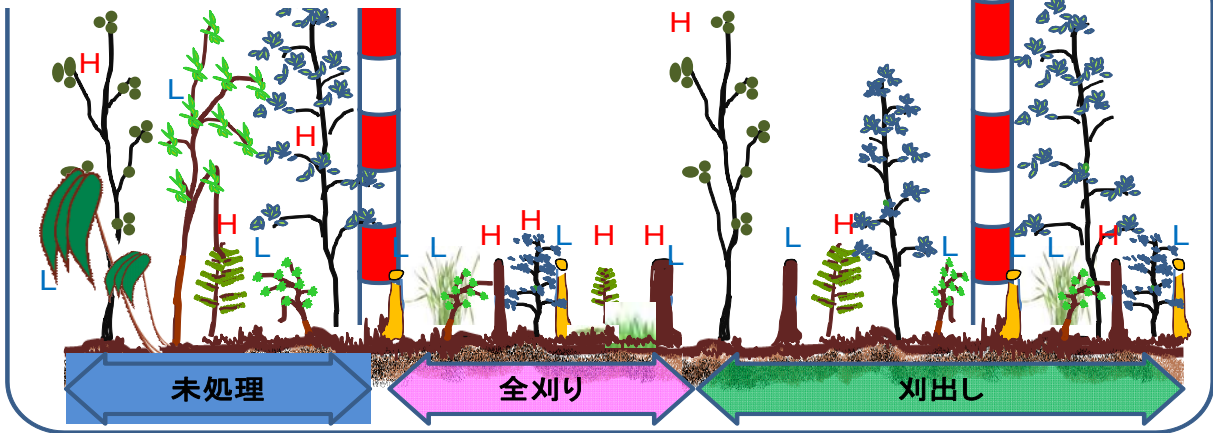


各作業方法の特徴



無処理

(+)コストがかからない。

(-)更新樹種をコントロールできない。

全刈り作業

(+) 30cm台の稚幼樹に有効。目的とする樹種の豊作に合わせて全刈りを実施することで、新たな実生の定着に期待出来る。

(-)残したい個体まで刈ってしまう。

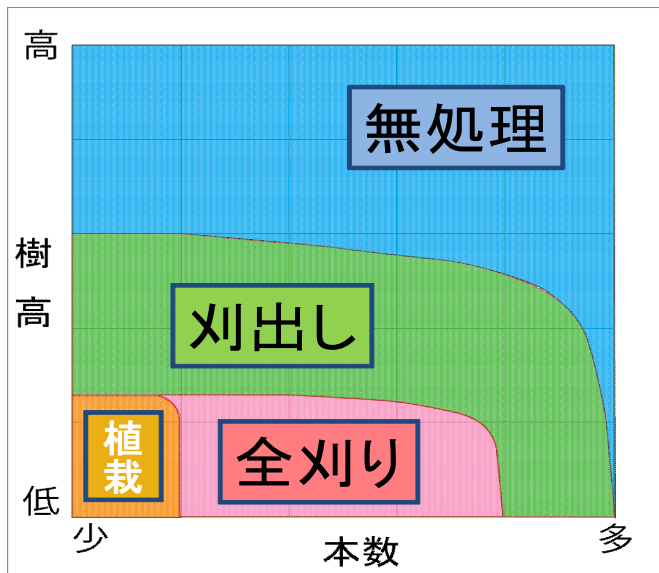
刈出作業

(+)目的樹種を確実に撫育、樹種選択も可能。

(-)手間がかかり高コスト。

24

更新補助作業の作業種判定



作業種判定基準
(作業する立地により変化する可能性)

- 無処理-**
競合低木以上の樹高があり、目的とする高木性木本が多数ある場合。
- 刈出作業-**
競合植生以上で、競合低木の樹高と同程度となっている場合。
- 全刈り作業-**
競合植生と同程度以下で目的とする高木性木本が中程度ある場合。
- 植栽作業-**
新たな実生の進入が期待できない場合。

成立本数と樹高との関係で『全刈り』か『刈出し』か『無処理』か作業種の判定を行う事が適当である。成立本数、樹高が小さい場合は植栽も検討する必要がある。

溪畔の立地条件は多種多様であるため、現場ごとに適切な基準が作られることが望ましい。

25